みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第1巻 探検の時代

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 千里文化財団 公開日: 2018-12-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 憲司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009289

第1巻

探検の時代

＊探検隊の見習士官　＊山と旅
＊探検の時代　＊探検記をよむ

「梅棹忠夫著作集」全二二巻の冒頭を飾るこの巻は、「探検の時代」と題されている。その巻頭で、梅棹は「探検という原点がなかったならば、わたしの生態学も、比較文明学も、……いまのような形で展開させることはなかったであろう」といい、探検こそが自らの仕事の原点だと位置づけている。それゆえに著作集の第一巻を、この「探検の時代」にあてたのだという。

「探検の時代」には、梅棹がおこなった探検のうち、主に四つの探検行が取り上げられている。ひとつは、一九四〇年夏、当時第三高等学校（三高）山岳部員であった梅棹が、藤田和夫、伴豊と行をともにした朝鮮半島北部の白頭山への遠征である。この遠征は、梅棹にとって、「あたらしき登山の発足として計画されながら、結果として……探検家としてその開拓者生命を発揮していく契機」となった。梅棹の「探検の時代」は、まさにそこから始まることになる。

次に、やはり三高山岳部在籍中の一九四〇年冬、とくに許されて、京都大学に設けられた京都探検地理学会の樺太踏査隊に加わり、南極探検を想定しておこなったイヌぞりの実験。そして、京都大学に進学した梅棹が参加した、今西錦司を隊長とする一九四一年夏の京都探検地理学会のポナペ島調査隊。四つ目に取り上げられているのが、一九四二年におこなわれた、中国東北地区の北部大興安嶺探検である。

これらの探検に従事した時期を、梅棹は「探検隊の見習士官」の時代であるとし、その後、モンゴルやアフリカで自らが学術探検を組織していくうえでの訓練を受けた時代だと述懐している。事実、大興安嶺探検の途次、梅棹は、この探検に成功したら、中央アジアの遊牧民の本格的な研究へと歩を進められるとの思いをあたためていたという。その二年半後、梅棹はその望みを果たし、張家口での研究を実現する。以後の世界各地での梅棹の活動については、この「著作集」において、地域ごと、テーマごとに一巻が当てられ、その軌跡がたどられている。（吉田憲司）